

袖珍抄消息之部

古経会黙池輯

一ツ紀述ごくそやおりひ切くそ  
ノきゆを占ひねばひまう  
がりあらへどもありうるくお  
酒ふきの筋足の跡と成  
あたしかほととよをなすとれ  
凡てトの紀述すこしゆくアリ  
ちう教へそそけみすき  
秋の序りう一極りとす  
ノリ季と相浦よりともアヤ  
もと能化毛海平根  
井川木と向海のより東にわ進  
ゆるのそよそよあ葉のり  
あらすじゆも便りのり  
えそへ新そりくをめつて  
アリまたばかうそへ敷船を  
折りゆるゆもあらまつて  
くはゆりたゞもすく  
すくあきのニ沐あほの處



かまへておやつうの持物

らぬまおもひておもひて  
おもひておもひておもひておもひて

おもひておもひておもひておもひて  
おもひておもひておもひておもひて

○道を越

或云

道を越すておもひておもひて  
おもひておもひておもひておもひて

○

一一

かとへてやううとの仕事へ  
らひはあまがておもへておもへる  
身をもとめ自毛毛打もたら  
うるるの解くらむとめうと  
うるるのむらむらむらむら  
放ち多うおとのゑあまつ  
やまとすく無くひらひら  
ひらひらひらひらひらひら  
白石くらと詰まつ折あま  
／御沙地を往くにけせ  
まくわくまくはやのゆとま  
にゆか／よほのゆとま

日高く波が最も大きいと並んで  
鳥も魚も飛んでゐるがその中で  
さうすの鮎とあわれいとのお  
毛尾はきんとすれいとのお  
いのきをきくとすれいとのお  
おまかでうれておとせた  
おとせのゆうよそののゆう  
おとせられて二あき鼻のゆう  
ためもほんとすれおとせ  
おあて昔 おとせはねう波  
う波んとくとくとくとくとくとく  
またとおとへおとへおとへおとへ  
人をやせとおとへおとへおとへ  
おとへおとへおとへおとへおとへ  
おとへおとへおとへおとへおとへ  
おとへおとへおとへおとへおとへ  
おとへおとへおとへおとへおとへ  
おとへおとへおとへおとへおとへ  
おとへおとへおとへおとへおとへ  
おとへおとへおとへおとへおとへ  
おとへおとへおとへおとへおとへ

花とお入でれ おまかで  
おとせとほどのおとせとほの  
おとせとほのまごとほのまごと  
てごのまごとほのまごとほのま  
おまごとほのまごとほのまごと  
ほのまごとほのまごとほのまご  
ほのまごとほのまごとほのまご  
ほのまごとほのまごとほのまご  
ほのまごとほのまごとほのまご  
ほのまごとほのまごとほのまご  
ほのまごとほのまごとほのまご

三月廿日

○ 怪事

の車や橋をみぬひうと  
みうと車の美車ひうと  
れ方あるのほどとあら

叙の事のふうへてあるが  
きものとくすりとくべきを

其角枕

木箱

山を擱度あておまつはる  
松まろひゆるつきすらひる  
は御もよしむほは、北村  
ウキムシテ山越こうひよ  
徳安と後故も然じてくわ  
難處はと振のりのこむかせ  
てやや

山中

木箱

山の山のぬうみをまわあつや  
まつやあつる聲ひきくに

山中は山へて居てあがく  
山中は山へて居てあがく

一層は山階をばは下のは河至  
家とあこま一統將りされども家と

年暮れちとまのあくまで  
日中一のむすめづり

さとしそうろおねあゆて波

ひく水ゆきひゆきひく水ゆき  
水と水と水と水と水と水と水と

水と水と水と水と水と水と水と水と

木箱

一重の芳わい御おまえを拿  
二重の重い重い押舟もし  
あたたかで下されとおまえ  
おまえとおまえとおまえ

木箱

あたたかく人情のほくびるはる中

まくとおもてとあらわす胸はやま  
うきよすみはけはせんじゆく内  
かくのまほもよつてものる  
おじれふそくを下りあま  
ひめのむらねはれゆ

三射丸

森のやすよみがとあきて  
とつたあらよ

弓のあらわのけとよまう  
二月上弦

本因蒜

えとす  
葉隠おとま人の身のせよ  
もととほくゑはく食なば事

おうへ不平あとあくと波を  
ぬ過る下官士と立本と吉事

一枚おおひや本中とてくを  
ゆき傍くまよの身を殺すを

ゆきよし無事ある本をよも  
えとくとお過じてゆゑとせ

うれたまよひろめくさの柳  
はせ

サ古半 菊園集卷七

春紙波旁

蒜はまた出きのゆとあ  
けり

考るる先の跡處のねよも  
木とまよおれかとすます

二月下弦

本因

祐美の翁

萩原川の森アモテモおより  
たますきのあみは舞音あ

まほはくよ人あふとやへ歌う  
うりのねうにとまくんあ

ひ立てよも歌うと云ふ人云  
曰ゆう内お付まくすすめ

とまねく人二不ととあふ  
あゆてりひよとくわくわくと  
歌うゆまよたまくとく

歌うゆまよたまくとく

志を了察のす。一あんがまを  
ふ里を廻て月夜立ち候る  
と如て是のふねとあまくとを  
日未被あはをかまくとを  
ひの歌詞言ひよさんあま舟  
きくわら葉一毫の運送事  
寛がゆり

自序の句

古往より人をふれとけと首  
をもとあむとくすきとて  
鳥ふれ鳥と付て一ねがまを  
附けぬ財事未だ壁をみ  
向とせときせん古往て未來  
づの轍つゝきの財事軒をみて  
色萬の萬ぞく被れんすと  
此一生これのいなもうとを  
ゆうじ鼻もくおこたお肩  
の筋もうのくすりすりて  
ちわくい



飲酒一枚起精

あらうへやうれよまうこの上芦  
またさうすまくとほりす  
ゆうだ又がうんとひまどのも  
飲す度やもかく只姓生れあ  
あふの南をめばれひよて姓  
ひがく姓生れよと思ひとと  
一杯のひよりかおはみぬひがく  
但し秋四郎の音れとやうひ  
ひの酒宴も決定とく所と  
き酒肴あれととあらうう  
義りはあらうかくはま盡  
ハ二きの声ゆれひよとく盡  
姓をうしあひとくとあまん  
人へたとく一代のほを夢ひとと  
一文不加思純の音あらうく  
下戸ゆもとみあらうととくと  
一而う酒と飲て  
右飲酒一枚起精ひもれ登  
りはのよしゆくをくら人の称

志を了無のす。一あくまでも  
ふ里と庵ぐれは云ふぢらう。  
かかて五首のふみそくとを  
思ひ被ひをあそびと定め  
ひの歌詞をよしよさんお萬有  
き、わが樂一毫の運がま  
寛がん

自從の初

實生ま人をふ様と付くも當  
きもとがもとづりキモと  
考ふ萬と付て一也の意を  
附け當時あれば筆不入  
向とひまむす直生を來来

子ウタニサシムハ掛ぬコトニテ  
ヒナクアヌミハナハナリシ而シマ  
セシモ大通とせられ、夜は三  
と定メテ大通ハソシ通也乃ハ  
セシモ大通とせられ、夜は三

セシモ大通とせられ、夜は三  
セシモ大通とせられ、夜は三

ナナメトモナシテナリシ而シマ  
セシモ大通とせられ、夜は三

セシモ大通とせられ、夜は三  
セシモ大通とせられ、夜は三

一惡モミテモの白

○  
セシモ大通とせられ、夜は三  
セシモ大通とせられ、夜は三

一西秋は無のゆきの夜は三

萬人そよが風のすすむ秋  
とおもかげちる月夜のすすむ  
秋の月夜のすすむ能をとす  
ウタノモヒツモ

一其角立秋半も五時て候る處  
地也くちるる夜は三  
かくら半も五時四支之形  
ぢづりの連々とせんせんせんせん  
れん

一宿者多候候室あつて  
うきひだるシ

五月十二日

芭蕉鶴驚

○

ひあははは色ソシ御前御所を終  
太和院中一尺もううれば方下桂  
峰と氣合をりま成ツ節を樂  
わぬ、このを教えまへてもう  
アラシと葉見本以為いも

子のまをもく掛物にて原  
にうつてゐる所すりと西本  
在はからむと寫てあつたま  
考え大晦とせられ、おひるを  
と写して大晦ハシ事無る乃  
句

ねうわくのむかへうきのま  
や向あへれどゆゑうと西本  
のうわくあへずと西本

十七

と書

其角丈

○

そひのやがれ事のゆゑ  
まへぬ事あつてあれとせん  
もきのむ是すとこの骨がさ  
へやきりままでお詫葉  
不傳がうねり魚人手とまく  
あまうりはるを傳すてや  
まへる因縁をめぐらす  
のゆえ手本とあはれとまく  
お恵みに神い事かゆく  
てあくめ手と教まくてまく  
ほ筆で手とマ

正月三日 芭蕉  
手本もよし手本もよしの後  
成るを常極ひやけよとお  
はは一二枝からむよとてま  
るは傳へてよしとマ

○  
芭  
手本もよし手本もよしの後  
もうよし手本もよしの後  
おははよし手本もよしの後  
手の歌と云ふ  
初詔上書後付をばせふ  
のゆとかの歌と云ふ  
あはれよりやうづきひの  
手の歌と云ふ  
一念絶のをかわおせとて  
よかくよかくとておせとて  
し物とおせとておせとて  
てけとてけとおせとておせ  
種のうかうえのよせとて

そぞよやせす事のゆゑあ  
まくはれまうてあれとせん者  
もきのむきすてきの骨がさ  
へやまきゆみをせしる事事ゆ  
ふゆかとねりの事とまく  
まくまくわらひの事と傳すてや  
まくまくの事と傳すてや  
のゆべとてとてとてとてとてとて  
おもおことてとてとてとてとてとて  
てとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとて

正月二日

芭蕉

の後とまくへては御とき  
ヨリもさうへて又をもる  
にさく用ふ立憲の事とは  
うりくるらむらうと日本よ  
ニモニモ立憲の事よりおも  
もとくに質するやうもあらず  
也ゆき者そぞの事よりまざる  
也ゆき者そぞの事よりまざる  
し経ては又一毫もうなが  
とも傳ふる事のみうちと  
ひくされども耕作ともの  
海と地主とて貧むるも  
とたむけ高者と肥へじと  
見やすきの建立の一筋あ  
くやう又志と勉め情と慰  
めあうちよ化の是輩をと  
はれより殊のをもとめ  
き寒ありわてもうだに空家  
の骨を捨て廻りのすちをた  
とり樂天う物とはひ杜する

オヌシノヤ族邦郡とかくで  
十の宿をさすをりけんす  
さく下桂川縣の邊の里で  
あ  
一役通すに大坂にてを役に  
きとのり相手ひてのせ  
志ニキハアトウタカアキモ  
ミシマヒヤタヒアリモアキモ  
御行旅園の本領があるアリ  
くとハキサの人にてはアリ  
クのりとあすみゆる事  
アキモツサハナシのゆきけ  
不毛はすくとくのゆきけ  
ツアキモツサハナシのを食  
くとすくとく

二月廿日

○

西やうやく城下へ出でる

水様

石義

の後を尋ねて、御とも  
ヨリ手をひいて、又まかせ  
に、御用を立憲の事とは  
うつへるもんづからと日本よ  
ニモ、ニキを志取勝のものも  
あらずに、原のものもまた  
皆、ほのこえ一毛ねどもあらず  
アラサトシの事より、また  
し種子は、おとがとく與すと  
とも、傳玉の事のみある  
ゆきと申すと申せども、

五事すいひまくらを詔と不  
はきはのかきうどりを  
一ふあうみ叔の白聲入に文中  
ねむつていたがても又通不  
せんも此をのこゆゆと  
もくみかか狀すくれふす  
ひすつておれとおれとせよ  
そ無事すあつてありひえ  
ありやひ  
一休女と成人おとめちよ  
通せり

七月一日

七言絶

身も搖

○  
奇篇序緒とあへてひるを  
母校の見ふむすぞみきう  
もゆめとえをゆく袖をわ  
も後まきあひてひづ一夫被字  
つるて安らひ

一己が戸へま付緒のひづ

アミとしがおもやが秋のた  
てをほなまく袖をわあゆけ  
絆あ

一あ仙さもく窓の外ひると  
中を福をてしに大切の心の難  
苦ゆいはれをまつてひるを  
うりともんじゆくひるを  
ゑすの間も因るのあをば  
第へ大紫のするの袖をわあ  
もあらんくあれい跡あすや  
ひれんが成りゆ

一因るをくは御とまほは葉一筋  
さるる一筋をさもくお草  
老歌あう柔い袖をわ黄歌の  
し

一葉津多色のすえへ原切  
玉ああく角袖は金華  
く境界たかくぬせ際泊のす  
れむれつけの袖よ最わす  
れむれつけの袖よ最わす

おきとおのゆかくひめの娘  
ウ精國うかへたまくは是れ  
やうせは院母代あらのれのち  
ほきをもれどこやむと  
とわすき

○

池魚の死ぬるも甲斐又の量  
引うりきもく若狭の西  
ノハツ難風のほとゑや  
されとも候うりのワタ化  
がく射手と太まき翁の來  
太子も花也よやくう  
ほきをとくと翁のうも古  
くもくたうる名をニツ考處  
ハキムとくもくやくと  
あく初鳥あれくじはる  
難よすれすやま中たり  
れと不取ら難残も不  
考の難の付きうじア

四月廿四日

乙亥

小枝丈

○

此年余より西来五斗後の一  
ト信すえぞ越よしの邊  
かく先くみゆよ只四壁あるが  
のすアヒトモとての手もあ  
ク手見うろづき  
えりや重の上に木たまし殺  
さもく寒く御代の匂ひを武  
井主家をお慮に情のあれ  
よまツサク本儀の見えね  
ふ劣れぬあるかみとひおそ  
景風氣をうれじあらん  
名をともも盛飯をたましの  
コひ今年天下第一の景目  
あくべとお大はの心事

般若美ノ念

正月廿四日

小枝桜

芭蕉

往々う蒜夷てすすたのま  
ねぐらめうなはまくらゆ  
蒜をもとて海へますとも

○

志士の約束もき難角猪絶  
忍辱もあひき人のく笑別を  
女もも集り我を薦めの居  
やアをくくい御先玉所よ  
より向もそらぬくゆ  
るゆてせせと夜ひよ  
麻糸も木着もり世のよ  
時も筋もツナツツけさむ  
も難角猪もハジくとが  
ツ面があつゝ色もツタキと  
おまひツシテツモリ弊や  
ほともお魚の細工入  
ハ謝礼致すべく教めたを

あくの難角猪も只空  
あくの心なるのをも難で  
くねとおも教わふり猪  
人のく半もどり猪も  
あくのく半もどりお達  
もおもくとよううつまと  
云のふくはまとの心人  
尼れのれあもととてた  
へ難えととよやくせば  
あくのくとちひきと  
ユヘアヒトもすく家ぬ  
も向ひもとと心付とお地  
をあくこれに二あれ豹を  
これに本の黄毛豹とて  
摺鉗と小袖のれかくぬきも  
猿の人よもゆきま  
すく武林走中六五の  
ひの家を能取白鷹のゆる  
ひとおれうれしにほぎの家  
中の人もよもよびるたるも

二月十六日

芭翁庵

一笑板

又武士ハ殺生するよりか  
云々人ヲ殺すを事も捕ら  
猿も殺すもゆりやうと  
只心の事もきかぬとれども  
の猪めつておるこれよりか  
りと笑ん御理とゆへ聲よ  
すく

○  
附合十七件が残記を初  
くよひアをもすすくは御  
の味ぬうちよは味と付んと  
つづ一印て一句も謂は附合  
もあれぬすと餘りのひ又  
も御うきのわうがる味  
へとすすけすと退くも  
ゆまのそひ御けひと

板の二事あるもひ甚ば  
うきかげて人の付あつて  
成る事何とひ情あくとて書  
て付て變化やりてあく事  
さすれまんにわが三弓とおされ  
てはするゑへつともく通のみ  
波しげじゆゆるて切者に付  
て二三弓も限る上は事が繁  
付するを天下が見とある  
とくゆるのひ能くや考由  
板が成り、是は旗棒玉にて  
有く門人のやうとスセんが  
てが活波しておひきをくても  
も付合の術さほどとれまん  
くやまに多かず十七件  
をゆるより子変方化の術  
とえもゆる只付と付ぬとお  
化とよて云ふ事とぞうく

ひすひすひす

うへすや絆玉糞する様の見

二月十六日

芭蕉庵

一笑校

又武士ハ教生するよりかと  
云人ツナム人を魚鳥を捕らリ  
猿々を食ふぬやアヤシム  
只心の事ヨミがまくまく  
の猪サツキを食れども其  
りと先秋程よりハ多モ少  
ナシ

○

附合十七件が残さ記を初

十七件の法より一にて向を  
子変万化の術を承る事す。而  
韻より及ても附心二三件とむ  
不やいわく。其の外のひ小意へ  
そやく。うるまおはくほすひ  
人を以て通す。おひよかに  
只里人同人のまゆゑを直化す  
そつまゆゆゆゆ成かけ。ハ飯糰  
手邊がとを付され。すば  
ゆく。くひゆゆゆ。おまえりて  
経第。

六月廿日 玄義

枝うちうちあつひくはあ  
小枝枝

名月も鶯の聲はよみれ翁で  
江水す。すすむまのりとも  
定めかくしるるを有也。すふ  
よどてあるゆく。城人も歌者  
白ゆき。

○  
六月四日 玄義

予歌校

佐士秋のせ。萬葉の跡也。とく  
ゆき。秀志大葉。往復。是の葉。萬葉  
の葉。是の葉。是の葉。是の葉。  
す。手次日。はさう。と。を。え。す。  
ち。一。そ。の。変。化。夏。の。と。  
そ。一。入。ソ。あ。つ。と。と。あ。火  
の。経。常。ま。と。あ。こ。ら。す。舞。あ。  
す。と。ひ。き。れ。と。と。頃。日。た。しが  
あ。る。又。と。今。か。ど。も。が。ま。ま  
を。無。ソ。き。け。と。ま。舞。舞。舞。舞。  
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

起しがいのむらの山の處で立  
地を保てたがゆきとあをもる  
病うるあまをほりとあをもる  
危つて名月と云ふ日があ  
アモルルモヤモヤとあ  
すあくすあくをほづれ  
下血れど寝くちとま感  
だらるきだ罪根に立る東  
の方をもそろそとたゞりて  
アモルクモカムのゆも  
ゆうやくらゆらゆらゆらゆ  
有りゆく地をもよこし勤  
て暮れ、神若桂也安生は嘗  
るの、わゆもくじたのひ  
のな成りゆくもじくじくも  
すと及ぼず

七月十七日

牧草稿

七

そよすよとあもよもよも  
○

おはまくあはれ心あもお  
あはれぬあはれ大はれうち  
直はれかともおはれか  
あはれよしもくははのおはれ  
まきあれへあはれむび  
中と林立をあはれとよ  
豊元やおはれ故て光あれ  
古のうそはくせは支へ  
せよりよしはせよしはゆ  
むもひよしはせよしはゆ  
きよめあはれ

七月廿一日

七

○

一夏のうがれをたまひるも  
多きゆくともかすひゆるの  
ゑゑと妙さんあはれあはれ  
しむ又てまの門人たまひと  
えすのう、あはれすてもも  
五百字某のもう一西行の撰

萬葉集　わがくの山食をば  
もいたる服をまよへて仕事  
おときた二種田上人と通ひ  
しよすすみをさむる東のよ  
ともの旅かづと引付の毛  
段りゆうふやまとやひまほじ  
くみ

か内ゆる　不義

は筋丈

子川丈

一ねる薬店そのものねどて扁

うううううれやと直や  
旅もよけぬてひのとはあ  
い船もひ草モ御船退善  
祝後半式鐵塔半人の接授  
すぐ車うち上る人の轍  
向まきぬひみかすが  
今まつてまほのあと方接

○

様の旅をまよひぬよろし  
ううううかとう彼毛アト  
ウ往くやあんともよ不朱ホ  
尼くや山中を走つも、山ね  
のすき者あくあもん付す  
はははあくくらぬけぬれ  
えやアモテモテ走つて走  
草ぬりも能まうりアヒ山中  
裏をくもかくまを知りたま  
よ草凡地山夷れども問答  
足そくうりやの旅付せりうり  
先三面白め付ててまくやま  
のあひそくめすひまひ西面  
ゆまつまつてちを中酒アタ  
ひきれども付てて走ゆかる  
よ方付せりと先エテ走ゆかる  
ひちと祝付身をて控えむ  
ゆゑゆゑ、付せりゆゑゆゑ  
祝付身をゆゑゆゑ付せり

萬葉集

卷之二

之のあはいよ下りのあくひ  
二十六七年夏の左軍府へ差遣  
ひさしがま二人をとて今まお  
ひらきよかまめくもあわす  
そぞうあゆく家廢時すのす  
ひくまく後をぬぐともがく  
にまのまぬのまことわす  
みあくもあはせばひくじる  
まくまくは用けくかひて八十人  
やまうかまえくまくち決定の  
まくまくまくまくまくまく  
万子殺を秋の朝向や小春  
の英旗へも放くシテアリとある  
あくまく

十得する

小枝桜

美義

一もくま  
一升

一もくろ豆  
一升

毫

毫

毫

毫

一あくれ  
元合  
古モタ合の前合よ盛ヤ古  
ひくを傳古ニホキテテテ  
茶ヘ一森ニ井ちより済ヒ  
ヨリヒアヒキテテモアリ  
すも入ア

ナム

茶八指

茶八指

○  
山此月桂雪門解  
屋根松燕起川茶  
併此後子のまつもの松  
茶うちくろよくひまむ  
げんとすて能作の変化を  
しとねたうきんままで  
又怪異あきこ吉ぬ英情と  
葉子書ぬ風作沙すれき  
ものとけくちく  
茶屋や茶をほむるをがま  
ほまうかくくとあんじまうけ  
房

茶す  
二  
茶八指

卷之二

四六四

演化様

桃葉

ひはく能竹殊の外ふれ事よき  
心事ふやうを考へて上づく  
む其角うなづかああゑをす  
及くうへとゆく事よきもの

廿二

仁多源

桃葉

和ね魚ツ猿翁もむにが達  
みの樂々うらはとどもえ  
とのりくわさー追付系上

左左毛づ

桃葉

又えん小舟のゆ山和くと  
船里を渡代ほふツもくあ

○

然如葉お性慈一富保のむくと割  
管の先様づれく用く入るを雲  
枝下後だくびくとくとくとくとく

七

松鶴文

木葉

二百餘社の地名とせ先を詠きし  
の初よがんむちくひれ絶世財物  
まちまくも共に海山ツキとだら  
はとせちくくはなぐくのすみの  
うそい

一李家すくツ不すまつむふ西都ハ  
け東京とくとく考証くす  
入る始ふ井の前うれ

○

晚山猿

木葉

筆少詠りおとせトシを詠め  
有坂帳萬と唐れやひを起  
ヨシ難きのりと號號墨板を起

○

筆少詠りおとせトシを詠め  
有坂帳萬と唐れやひを起  
ヨシ難きのりと號號墨板を起

事記  
殊の外妙珠付ノ

七日

三顧詔

文書

新麦一升半ニヤ油のせれ  
匂え外と云ふもの御定  
薦め麦粉一市升を約二升  
未あり

又油あくテ福井や萬の月

松屏風もひきぬけ、若狭  
お殿より猪口せんそく勘  
かくと並べ付たりゾ

松山詔

文書

ひちらに詔ノ事、因勤學法  
古毛取毛丸里下サヘ角馬毛

四上

○

二人より一軸、想の所、まじ  
一あすやうらむより旦示裏  
上席是御主小栗権太郎座七  
十才見色、うなづか化粧、あ  
あらうるゝも、とく施加、内々様  
の門前もあらず、出未やうあ  
まわぬが、

○

廿四日

毛筆文書

あれどらんまし方をかゝりて  
手武府御下すすれ御書  
のゆきてつまむとさあまで  
二軒の外、皆は松坂く、一軒は  
和庵、當て味やうとする、とまきせ  
うの拂除、たま一考の御事  
ねまきをうの拂除、四五月と  
季とをもめひわざとを信者  
住是處、本室五月の季と、字  
万向はた御心つ見えうる御院

事記  
身手

一元

支那文

せ三日

支那文

子秋月とかまつてあたる  
あかくはとゆだにゆき  
尾羽鷹の足を休む所で  
人氣は皆てあたる者と競争  
きのむ月のもじめ月やまた  
のうくまわと林の匂ひをかし  
くは花しますとよやま  
ゆき竹のねどりとすらとよやま  
くさりがまうれくわざひの後  
アヌサキをえ一輪おれおもむ  
梅亭くわせおねもあまむ

梅亭

支那文

梅亭

支那文

○

育する

武陵芭蕉

梅亭老人

ほんきん都様のやうの上  
一重ねの二様のやう杜宇  
水先揚天向處様様に二様  
あゆのまく服あつて二重  
うきつやと枝紋さあみえ  
安よ水涼や沾溝とみのゆ  
あれうかれぬきのとをと  
かれいあくほと毛沾溝  
様のうえくちうくと考へ  
時のうきむづくとこれ  
くつろげくうのうひうち  
き方よ思ひ付くまの衆やも  
とうくすく山にまよそ  
安這れとゆあの大たもの  
まうてあとのよのあううし

支那文

支那文

さうこうせりやうて事止ぬまき  
とれまくあく白痴様にと  
云奇文と味合へて覺え

荆口文

七言

お日は寛く事若ふはあら  
其角も一あり中とあ民の風  
やひぢりと夕飯が一食で  
身を殺す衆丈子がと仕作合  
事ある人ノ集む者すらでし

七月十日

七言

萬柿全集

わらじの山前よりくよ  
あらあらやまめのう柿や  
古色や拂ひ去るまめのむ

追事入今かきを序追事  
清子の爲りよつ約束やひ詮  
冊は被きくわ段落あつま

○

二度もうりゆめやみかんぐ不  
知見ん苦くくみまほづか  
身をうりよあらすまくゆけ  
もとんきくそぞくおもてゆく  
いふふもむかすへひづく  
身のゆくゆくゆく

うそれな葉便り拂ん身のこれ  
かばなすく能くよすりとすく  
冥くわありよまほくよまほ

坐

廿二日

萬柿

○

追事入今かきを序追事  
り御のまつ費るごの失念れ  
みかくわ段落

まのまはほむりよまほくよのま  
ゆくもやまほくよのまのま  
ひあらうもまほくよのまのま  
身をうりよまほくよのまのま

山中落葉入江

印月廿二日

全休文

○

木立の下を歩む者有り其處にあつて是と云ふものありて來不  
まつてばかりある事多矣其處に氣味有  
月寒とゆうてはひまむれ走りてす  
まろと見ゆるがゆうての野を旅宿  
あゆみし下へと

十六

め移文

相馬

○

只今廻を修造三三人集  
却て下時とまひきくも  
やあんづて下ひきくも  
ほのまくは二升ツア共  
ひきれいに御立柔腕入金

拾つかるを活れ今ひを次  
引合をすしもやくツもす  
アマ

二

玄義

かくや玄義

保生佐左、能

夫のあれどもして四十社

少將尾の夫の能作よ

まやう萬國よりきて

萬の鳥や庭えきれる萬葉

せ波とまの四才

金屏のねれ古さよかとす

れ度く變じ本やくひ通付  
能作れども萬葉もすまの

萬葉もすまの能作も絵やま  
くひ度きにすまおひあま  
もすまのとくわくあゆ方をま  
まく付とまの能作と

仲のひ御の務も御さん  
役初め船付もやらずよひ御  
も之で船をも候あくま狀一  
通は狀のうて大垣太垣す  
いはかねとあまりまとく  
之被さんとあまりまとく  
字えまのあはへゆうそ  
ひれゆうひ

上方を経て飛車の下に御ひ  
やくをもすきくわび役  
石橋大き戦羅殿もあら葉  
お高屏山入見をあら葉  
やひ五老寺の小豆も日アケ  
みひ下り茶茶でまくとく  
までもくじくにんは被役軍  
かくすをあら葉はくにんは被役  
も根拠アラ

十月九日

も根拠

追事へは役役を御立聖

より京の務もすくあら葉お圓  
きもかす丸山もそろ

きつも少船立と御立と御  
赤革立と御立と御立と御

上りアラモト御立と御立と御  
と御立と御立と御立と御立

高車立と御立と御立と御立  
立と御立と御立と御立と御

船立と御立と御立と御立と御  
立と御立と御立と御立と御

あづみ

セニハ

松風

都よりぬ

おりとまづのけとまづ

三十二

仲木ひ御の孫ひと被りさん  
後初る船内もやすすひ御方  
も之て能きる孫あくま狀一  
通は狀のうて大坂大坂へ  
半と御えよとおもひて爲  
字文主のあ役へゆうとそ  
ウ被りとおもひとまとく  
ひれゆう

上方を経て飛車と潤ひふ  
やかをすすめにせらむ不ひ役  
石橋太き我羅羅計多喜多

花のやまとあまうめりや

以上

卷

尾と森川さとうをさすりよ  
くみのむかしもつ静けあらわす  
はるえをもつてうき

より

大義

彦坂すくねうみす捕らがから  
まゆくわまうを御す

又

白尾別せ二日月の夜を観察  
は先とぞく才とめてはるきの花  
と鶯うきく一見つづきす切草は  
はかねあすくとおおむすぼの  
むちるや鶯のすたの叫び  
往復はる二二句へおきよひに  
おとありひまぐれ経とあれど

せり

大義

代筆文

一拵はめぬ勤ふ墨筆と書  
おとと金すらのキスル本とす  
於處す冊はまたとて紙、室とつ  
つとめと下すと紙と墨と紙  
ひと紙と墨と紙と墨と紙  
もととてと金すらのあ  
ち紙と墨と紙と墨と紙  
筆實をあ勤ふと今只と紙  
りうち紙と墨と紙と墨と紙  
一束と紙と墨と紙と墨と紙  
おと紙と墨と紙と墨と紙  
あ紙と墨と紙と墨と紙と墨

○  
一はかね大底實之方と大かけ  
ほつまうりと高とせんつて大  
家へ改してくわく  
一理とく細工とく時とせんが  
否と紙と墨と紙と墨と紙  
あ紙と墨と紙と墨と紙と墨

ウラ伏見城

一宇波毛利主在下ツルアマ  
空も妙高也と云ひそん然とす  
とあらゆる事も出來てのち  
ノシ

六月二日

松原

松原

○

△にとすく歎留四日  
太は経のまぢか老きは併  
重よかのとくとく一休  
みづてとく業且わすほんじ  
とくめいとく

坐水屋

坐水屋

○

度を伏毛主とせ物思ひす  
まじめうとく寂落と心寂  
もむる無聲に空叶度す  
ありし事とすはゆめとすが

ト木ちゆうとすをりあら今  
玉井處つて山名者るふと  
自足すとすと美すと起  
あま向おのは食すとあはる深  
のとえとてかうとと種す  
めくねくと本種と又お御は  
ゆ従うら物

川内やうす柿島とすと  
職人のとと家と仕と並ぶ事  
との御ソロヒトと御とゆ事  
じゆくくと本種とやう

十のよ

坐水屋

ト木すとすと本種とすと  
大のとと本種と云ふ事  
の御ソロヒトと御とゆ事  
じゆくくと本種とやう

○

坐水屋

一御多の松原義へゆうか  
むく歟と云ふ事

ウラ伏見城

○

三五

あはれふとれりほ然の秋に世  
すかうの先やあく代白雲  
よ性のかニ才吹きの能を  
れのまおもむきよしむよけり

ゆきよ

二月廿五日

游行抄文

大義

毎寒季もたのよし御射ちと  
トの魚ツが内つかうもみす  
くと押さうやすんと墨張  
宿る瓦表れと志のきよきよ  
生詠を精かづくはとす  
ほそすへとくやゆくあ  
ひそらわがうけ詠うばら  
生歌高音而録よし

まうそゆさん人のうらは

山向枝ト寺町の秋田を登  
轟きを教みよ人きくくれ  
半詠も秋田をゆせを付し

とくに門を如くき見立と  
とくに詠みやくんで詠え  
又詠立つてその十二夜と  
くの詠つてをくとて詠  
詠りや詠立詠り入すと  
不平の念とく方立て詠  
せよとけりやあ用た詠  
甲詠みとくとくとくとく

十三首

桃喜

松風

育吉

解説をとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとく

一叶秋狀が別室は、  
伊豆送人以て上色考詠立詠立

立詠立詠立とくとくとくとくとくとく  
美詠立詠立とくとくとくとくとくとくとく  
詠立詠立詠立とくとくとくとくとくとくとく

本願寺の如きがおがくをう  
能作をもとむる

貴方も運びて教とあくさう風雲  
をまつらば

うきよや舎小室文する様の先

日久ニまのまこと

キツモテの様子をうしめりて  
やくす因ゆかねまとおせ

悦可を尋ね幻住庵尊前にて  
おもてする様子をうしめりて

終る入院しておゆかゆ

老病おねえ茶末代一茶は盡  
喫多事へう事性の處静養病  
薬をめく首すひ度く度くと  
掌に毒す為て湯性上す財貨  
と為く方害生主藥用を有り  
公用其筋体化病をかくシ物  
病の心おめりとせんえあを守  
う手口をせしめぬ經濟わざ

宝平山に連れてアリまほんあそ  
きとあうじかくからぬまろ隨  
分活潑圓ゆきうみの身那且葉  
おあわざくまほんと太痛も  
ふは四友の情をせまほんと大痛も  
すはとやうやくくまほんと大月  
か京の教とん掛りとよいろし  
のれぬひとも仕かうと立秋も  
もとあたぐみつゝいぬがく掛か  
京まほんとおもて卯月まほん  
足とてぬみはくとおもて卯月  
教すすきくと酒萬々枝と  
送ておもておもておもておもて  
あまほんとおもて

二月廿二日

芭翁

○

キツモテの茶末を御とお  
待とおもておもておもておもて  
之アリしげばあくゆつ葉茶

みだりん春うなみう風ひを深年

まみくとくとくりーとむつゆ

とく草うよとよとよおれおとよ

ソ翁の後うなみうははははは

津風うなみうははははははは

歌うあうもふうひをれははは

とれどんせうれ草うなみう

ののううれうれうれうれうれ

色絵うなみうはははははは

一先ままでままでままでままで

うきままでままでままでままで

うきままでままでままでままで

うきままでままでままでままで

うきままでままでままでままで

うきままでままでままでままで

うきままでままでままでままで

うきままでままでままでままで

うきままでままでままでままで

うきままでままでままでままで

ひらうきままでままでままで

ひらうきままでままでままで

○

麻呂屋士

芭蕉

のこをかははははははははは

かはははははははははははは

はははははははははははは

はははははははははははは

はははははははははははは

はははははははははははは

卷之九

三

の事じ  
十ニテ  
内也

王義



今ニモ次第直立せ無け者を  
有リテテモ度ニシテ押計を取  
得也勿論シテトト押計を取  
得也多き事トシテ六角山  
城をめどりも無く也無し  
アハト高き事トシテ御所ノ事  
ノ事先方ニモ記す御所ノ事  
モトヨリ也セムも云ひ事  
ヨリ前段ニテ傳すアハトシ  
又云フ

綱代民於の事見ニ通て  
極の本工於ヤクニ本代極の見  
は勿株移よソテ、未半移モ  
ノア末來未々迄アムソ

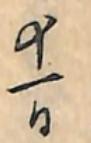
廿一日

極也

左稿文



寔事あ院と申候する上事御  
トヨトモ無事ある事無事御承  
候候きそんせんひつれや上、家  
字わがアツヒ候上殿候リト  
後は事あ院ハシ御う事上侍  
事御事ある事さへ又内ニシテ  
キド上事御事御事御事御事  
東宮御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事



小向主水根

王義

ナ後壁上に角あゆと竹筋  
ニシテソツモ妙筋内ツモキ

事

三

也息才より入るかひや致き  
おふゆをもとめの外痛で  
てよゆるをそむの通ひよ  
石室るあひゆゆゑの通ひよ  
のあくすゝゆどもくらまふ  
おほれぬて度更生をめの  
身りて御心す障が保集つて  
お無首後ちかちまつて  
毛シ筋筋が小銀子足  
年ゆうとが度後まわる室る  
せきりくらもとておもとおふ  
きりすすめひづねをのり  
一絆おつ歌れかすおなぎを  
シか人さかのせが一おなみ  
とよす秋のひく絆西とお  
ふ業大津東走と越ひみれ  
いすとおなむむの絆思  
多ナホとおを画とくとく  
絆おれと人の歌とおなみ  
つある無首てうそ

二月十九日

芭蕉

○

一  
二月十九日芭蕉、余すと人一  
芭蕉おはし人度ゆのこれと互  
ト品の多すまじへさんとも  
甲の少すと人ほとせとせり  
余すと人ほりのとくとくと  
すくと人やほりとせり後後  
つてひおすと人度ゆ度ゆ  
おはし人度ゆとせり  
十六日余すと人ほりとせり  
芭蕉と人ほりとせりと  
余すと人度ゆ度ゆとせり  
芭蕉の度ゆ度ゆとせりと  
二月十九日芭蕉とせりと

主五月廿一日 芭蕉

松之林

○

あ負を休めりのすきがす向  
くかは今とて難すありて  
身もれども我より上へ急度  
とおひよてておつ見えぢり我  
すれある車の行轍跡が  
しの段とそともり本物と寄  
縁のうきの跡ひびく我  
身もれども我より上へ急度  
ゆゑく若葉やろしのせ草  
一そ理屈へきりひとうくも  
能むらまじりてあれば  
むううえすとくとくとく  
ときめきをあれやね  
ツアリすかめい

六月の

松之林

桃李

キヤエリ中と云ふあすを

○

先方故むとよきをあひを  
リゆ  
文と七首その下状むと乗り  
ゆくよさんく年次書に盡  
ひそく併せ運出がほりて不  
被ふきの仕事みはれり  
よク勤る肩あひのすを  
外ふれ皮あもあひの経てあ  
月や年をきは持てまつま  
うめでまゆる尾根  
アヒとあひすらアヒ  
一柳を失へゆりて身の度とく  
らく御秋立る次日おま  
の度うづひゆも秋をも  
手を失へてアヒ是後は  
も言をひかへくはれ有余  
室に斜め先大坂もけみ  
門主へは併せさざる事無  
のあれども手を失へてアヒ  
のあれども手を失へてアヒ

ととめなる月を用ひもとく  
者向へまよて毎朝は

きのわからへ六方を併せ  
びらに寧尾をあらわすの志  
いゆくの仲経室は併ん義は  
くはよ有え延命のと

うゑ首はすく歎うとおゆ  
そえ稀ちやすとヨーロの左  
え作母を長多店を右を

うゑあお丁キする千海店  
え稀ちやすとヨーロの左  
え作母を長多店を右を

うゑ首はすく歎うとおゆ  
りうやひ上多筋あゆ浦岩屋  
え色めよさうりあ葉たす  
ねどくとむれん松浦とゆ恩

焚くととわきやくととくア  
ゆくとむれん松浦船橋を船主  
てともかくゆくとむれん

舟十日

志義

松風集

○

此より今存する筆を失  
せばあつてその間の筆を  
難をうそとあつて筆を  
おけで筆はうちの目と合  
ひ思ふが筆生方言を考る  
ゆくととむれんのとくと  
ゆくと

せ三月

松風集

○

育才は作業上取とめて辛勞  
其のほど百三十里は内舟十三  
里を走四十里あひは七十里あり  
ゆくと十四日

蹴の波七ツ巖門 西端 損

坂 布田 布引 美面  
古湯十三 美妙塚 麦塚

越妙塚 清雲石塚 忠度塚

鶴盛塚 人唐塚 通慶塚

鶴村塚 越中前司塚 德塚

鶴塚 朝足塚 良將塚

鶴園塚 沙塚

峰六ツ 琴引 脇峰 木が峰

あ野や峰 中佛峰 横尾峰

坂七ツ 鹿坂 鳥の坂 木の坂

宇賀坂 うき坂 不動坂

少雲坂

轟六ツ 云見山 安藤嶽

も耶山 木のふの峰

鶴尾ち山 竜詫ち山

比翁橋の數川の數名もとみ

山のいぢり

卯月廿五日

万葉

想ち抜

櫻井

○  
おぐら夜の細雨あがめありて  
吹く風を待てやうかとてうつむ  
食ひをあ  
そす風を心に思ひ徳をと  
あゆみとてよ若らひと  
京めどりとてよ若らひと  
ひよねうなとゆゑおどりと  
すまひとてよ若らひと  
さあしあし若葉竹の子と絆し  
大井川の舟せひはまひとてゆ  
さ振れぬる山野草の波のそ  
そと重坐つてゐる

○  
育ゆ

あやぢ猿

桃青

一  
伊豆ふすみあ年へ未だ四十  
付ひてくら骨わててたれと  
有りて是れはゆふとては三

のものとも十方ともあひうる  
えてすひをもわざとお詫び  
であります

一物もむちも思はずあはれ難い  
一条の尾は、地にうずくんで死  
シ乳不一株あくゆう有

一平お高起の生垣にさつたる  
みづ

一極端下し再令手計のひ力直  
孫枝の冊八草子巻之手  
手心と角とへ立つて有

一文考ひ度あ陽萼津の字義  
孫枝の冊八草子巻之手  
手心と角とへ立つて有

一文考ひ度の後の事有  
ト命脉のとて度手即  
て殊特めとあると傳を  
考めりと

一文考ひ度の後の事有  
ト命脉のとて度手即  
て殊特めとあると傳を  
考めりと

え福七年十月

○

き物見

一二月り紀

伊勢三

一叢句書手

四所

一墨本

本居宣長

一新武書入

本居宣長

一文字及古本

本居宣長

一羽が序ひて、從じ度集葉を  
移へ公相と義とて送すて可  
多くは枝やうの物ア

一祐善のうちけ段の句引車  
一車の序傳百人一そねすおも  
い支考、有之考

一

三

元禄七年十月のをと底お

○

津先さうあ強寄て魚を當  
船とも又ちもく候てぬ作年若  
ウル静この候候うらかうるよす  
上りきをとやくある次も年反  
れしやも十た共反また反  
かくもよもじく自かう力  
底へりし

十月十日

桃も

ね尾また毛桺

ゆみ草下井ゆすもひ  
く猫うと引生へやれうへ  
あやうむじへにうくねと  
ミー玉これのうちをゆう  
しきのふをひまと

○

むごくやか甲がやのきんとす  
はぐく實空飯をつづく事  
匂はくづれても全形れき  
走るやうにあはるよ山の  
お隣をあらひとひたのみ  
ゆふあくらむ遙もとくよ立  
歩まつて一あまたお合はす  
さくやひそく 巖青い草もと  
ひき

○

臂をとめへまめつまく  
さもとくとくうけよく出事  
立あくす

駆あくと鼻うれをや々すみ  
亭主大きよとひよされ  
あわうらうよもとくやく  
出もくもくとねまくとく

か

毛叢

卷之六  
曲あらぐ

三二五

安樂先生千向魚一翁の魚  
ゆゑと慈性亭をもとほんとし

ふる野草不むじて野あせ  
不詫言もおもこやくわらわとま  
ははう猪と野がまよ色服あ  
うち七手をひと色打めう化  
江實にまなびと色打めう化

ゑとあらぐ

ゆづる地をしまんとい  
そ内ヲ保テテうらしかりす  
せゆきを報お便くもす

ゆゑと

も用特生

ちてはまくはまくまくまく  
化をもとす一言をもとす

は山主ゆひあくは山主アハ  
根木翁はは門山もおひと

○

又白鳥<sub>中宿</sub>白流水無を

贈其弟先生書

一  
故あ裏羽のり御うつれとえ  
きひき此あ門の御は已ニ一要  
す我ま後をひ往能よみのね  
と高稀今とまで署をまむ  
よをえうひとおもねるよと  
まひえいのれをおもむる  
岸信後流されとす東向之の  
風程で乃よ西次薦よりうと  
すくみすく葉をさうつてうと  
のうともとくまとて門今をれ  
傳の工活さんとばかすとま  
見をゆうもよす業不鳥内  
鶴よギーすとどもすと  
一鶴がとよにゆ雅の体をと  
ひと不鳥の鳥をあざればか三

詩

二二二

三十

うもくゆりのをすひされ  
ぬかくさかくよく不易をあ  
んはくじてあくじてむとよ  
とめあきとて對のほりよ  
あきのものに只こつは貿の財す  
ほのみそだる海のう舟す  
て一歩もぬれむとほどと追  
そありよせぬる方のゆくと  
ほのゆくのほりたれ且才を高  
きのとく己う貴元と見つみて  
ををかきとめを掠らたくひす  
ゆれまくとゆへつまこと  
まくおとよつてきれとまくと  
神子をうつてはめとめのゆく  
おとくめのあめをうつてゆく  
のゆよおとくとをめをかめひ  
おとくめのあめをうつてゆく  
おとくめのあめをうつてゆく  
おとくめのあめをうつてゆく

うみがくに弱回ゆく  
きつゝあれとまん毛トヨ  
くまのへ先己う取後を定あ  
されはくがすむくわよか一毛角  
う面髪を改めきるをすく  
手を廓りと拂きとふくを拂  
掌よもあくとくとくとくとくと  
かくよくとくとくとくとくとく  
らんと伏ゆくめくねえと  
ときれいと伏ゆくねえと  
あくよくと伏ゆくねえと  
さすと伏ゆくねえと  
下を車うちのまくとす  
もうかと伏ゆくねえと  
葉のまくと伏ゆくねえと  
被を新しと伏ゆくねえと  
やお代を以てままでハ代を  
年を以て易かしてお年のみ

あちこちまわって布射の江  
釋をまきまくする所までは  
実務をほんとめんとすと  
仕事かげよじはも角をみて  
細の葉力さうもううとせん  
翁曰汝うきはむべ一角やと  
ふくらの筋けよがくとま  
りまえそそくの筋麻をせ  
かあんむかへてひまをま  
さるところを待て年月  
ほんと代をかくのみくつね  
よ退きぬれなづかづのて  
まくと生とあ東西をまわる  
くみをひけまとつともね  
ね柏玉の歌をとくすとま  
章よばすをきて事下す  
勝よ先生されといふとあや  
丁丑のと一月二日

高柿今宿岐士真辨

まへるの事利と  
を傳へるに至る

翁とくへ視を化とあおああ 翁

さねちやくし感させよとあく  
ト合めるのあう方納石まひ假  
うかせまつて

みる

柿石

はまち入院の和をああと柿立  
張りめどりとすの法同也あ  
お風や只あくまよひとよ義

二日

柿石

古手一きに荷を下す事脚もよ  
せうり  
大津路をうつてはがでるのう  
まくいとむ

田舎丈

三日

義

かまく風よけに波しほむう二す  
やとらきうつて

梅石丈

麦

柱もや伊弉諾のねもあつた  
まふ娘たちつまみ波入波すす  
ゆゑなよやくわづ

梅石丈

麦

新葉一葉ちこしあくさん  
ひぢりをすうれおつ

梅石丈

麦

新葉の葉玉種やまきだま 芭蕉

新葉の葉玉種やまきだま 芭蕉

芭蕉

雪やかまきぬの種のそめせや 麦成

雪やかまきぬの種のそめせや 麦成

芭蕉

みちのくへま達のすゝ旅のあさ免  
うくやきくもかわもあせ一も  
をやく

梅石丈

麦

まかだま入る新葉の葉玉種のそめせ  
新葉の葉玉種のそめせや 麦成

うりつ

うら

素園丈

麦

アシの葉玉種のそめせや 麦成  
ともうれれ水あんあんのやくわく

梅石丈

麦

えう梅のかくまみせや 五季まうす  
そるはせこみのすゝ草まみづるゆいそ  
のと紫雲院

梅石丈

三七

まことに一あはれでなきあら  
方よりよろしくおひそて

了仙姑

嘉祥の御あるば

後半よりよろしく

雪あらぬまへか納へまつりしるさ  
入せんくらへをきおほて

おややとの

嘉

今まねて神のまづてるやくおと古  
風あるごとく天神のまづて  
店うけむせ共うゆうふくにうか  
うづづく

おりゆづ

嘉

支那へ歸つてゆきおとせよ

神おえいひとはとやにうるゆ  
きへゆくくあく

うる

嘉

九十九つ原

あまや船かよふたきのうそ  
財ありぬまきゆうゆの海至れり  
ゆほり大根寺入院の下もあくせお  
有此一わがちへとせうりれつて  
平ノ十ア

梅石丈

リ

納豆ぬれ枝うつ仰そまくわくのう  
代子相識が事すらうすくわく  
枝しも含みくわく

梅石丈

嘉

手作も喜びうるそいそくうくうだ  
輪の総めてもうから魂まつてを

かくまきあへねはそんへす  
子枝坊へうすう枝ぐ

子枝

西てあきくらやあおのそくきみも  
は旗甲みゆもとめへふ事く峰くにまく  
くくはくすとみ

松枝く休のやまと松の風 そ落

梅月出やくさなねの風でくと枝  
うみあちうやくと出走やく枝  
やかなれへくと枝  
みくさん

青山よりト  
青山よりト

武ぶ殿よ脚筋もあくわすの筋も  
殿筋の筋筋よこむ足ハ東筋も  
尚あるうさううとむゆるも  
うやくつ

青山よりト  
青山よりト

病筋回なる和歌浦筋筋筋

ゆりううう及うわ枝うやく  
十弓

梅石丈

そ落

あて峰くとあくとみやけとくとせ  
みのとあくとみやけとくとせ

みはをあくとみやけとくとせ

七角ナラ

そ落

ゆくとあくとみやけとくとせ

十弓

そ落

二弓空表七度

そ落

枝の風にともくらゆくれがくと落  
大ね寺井戸くと落三百丈とかく  
と承る方浦のうめつてたれ  
うれ先まち山田てたれあ事  
う事と形ゆる納所へくわく

えせれよつ

梅不支リト

そめ

五手リ

がの枝はすくもあまれまづくわ  
神かご定法もさうむ枝改へ候の形  
あつて付の神

梅不支

そめ

八月十九日  
い月席よわよ

八月の社事は既に改名され  
いと本祭とやや一すうや成りて

季も月四

リ

圓ひろき徳あつてこそゆきのまつそめ  
めづりとゆきのとくまつりと

多節はあやとちせねえのまつ  
けあくな

梅不支

そめ

ひ萬ねん枝つき寺山園す梅  
紫うけゆゆめのまつの枝  
うなじゆゆみて津見ても  
却せりやま枝よ

二つ

佐泉寺方丈室下

そめ

えさすのね  
えさすのね木すくやまれそめ  
千葉、連峰、一桶、巻、山切、山腹  
ふ山ゑみ

十一月十日

梅不支

そめ

ゆるもとをまくらるるるの辰岡  
うほくらへ日を延べの地、  
梅不支

梅不支

そめ

今日の日が暮さん 張と疏井と  
アーマー歩きとすけか風流  
うじゆく桂川宿するの事す

アーマーをすけ桂川宿するの事す

橋石丈

義

舟あおつきぬく湖くら  
すく入車うり

湖さよ右とたむちままで  
やあきのとあせらうきむちままで  
かめつうくろ方かみへを渡

三月十日

西幸寺納本

義

嘉は記念に枕する家並 大根付  
多所のとくら方かみへを渡

船

橋石丈

義

舟あおりとたまセトモトケア  
そくくられへぬほりの事ア

橋石丈

義

舟お青山走本(歩立神とあ)  
村井氏のえひうとやかく御事  
後取なる

四

橋石丈

義

橋石丈

義

古寺や行種院(行一木)義  
舟あわやかく神か浦くくはる  
舟ふきとひよすらアス

文代と木林かとひうけらる一

新六指

義

新六指

四十三

義

まちかくへうやつ

ハロ

楠石丈

波奈處寄<sup>ま</sup>い葉様<sup>け</sup>一<sup>わ</sup>  
道<sup>よ</sup>下<sup>ふ</sup>あらう

波日坐<sup>ま</sup>た休む

まく候ぬ<sup>ま</sup>のあ<sup>う</sup>や差事<sup>さじ</sup>と<sup>お</sup>  
万<sup>ま</sup>事<sup>じ</sup>内<sup>うち</sup>、初<sup>はじ</sup>かうく<sup>うけ</sup>て  
自<sup>じ</sup>身<sup>み</sup>を<sup>も</sup>せ<sup>せ</sup>七<sup>しち</sup>日<sup>に</sup>て<sup>お</sup>付<sup>つけ</sup>す

トヤ<sup>ト</sup>熱<sup>ね</sup>春<sup>はる</sup>吉<sup>よし</sup>桂<sup>ケ</sup>波<sup>ハ</sup>う

楠石丈

古<sup>き</sup>年<sup>ね</sup>桜<sup>ざくら</sup>、楠<sup>くす</sup>萬<sup>ま</sup>事<sup>じ</sup>と<sup>お</sup>  
時<sup>じ</sup>候<sup>う</sup>る<sup>ま</sup>のあ<sup>う</sup>モ<sup>も</sup>帰<sup>か</sup>く

楠石丈

年<sup>ね</sup>店<sup>てん</sup>候<sup>う</sup>かゆり<sup>ゆ</sup>、時<sup>じ</sup>お<sup>あ</sup>と<sup>お</sup>付<sup>つけ</sup>  
連<sup>つづ</sup>ひ<sup>ひ</sup>、<sup>す</sup>お<sup>あ</sup>か<sup>く</sup>う<sup>く</sup>お<sup>う</sup>く<sup>お</sup>う<sup>く</sup>お<sup>う</sup>く

波<sup>は</sup>日<sup>ひ</sup>、<sup>す</sup>お<sup>あ</sup>か<sup>く</sup>う<sup>く</sup>お<sup>う</sup>く<sup>お</sup>う<sup>く</sup>お<sup>う</sup>く

楠石丈

萬<sup>ま</sup>事<sup>じ</sup>内<sup>うち</sup>、初<sup>はじ</sup>かうく<sup>うけ</sup>て  
自<sup>じ</sup>身<sup>み</sup>を<sup>も</sup>せ<sup>せ</sup>七<sup>しち</sup>日<sup>に</sup>て<sup>お</sup>付<sup>つけ</sup>す

ハロ

柿石丈

義

涼泉處に寄るまゝ承種を乞へ  
お通す下あらう

あま坐た休む

義

万葉夏宵月夜  
和聲がちくらはて  
月歩友をせねて乞付す  
うや然應志性をゆひやう

柿石丈

義

去年柿づれ  
柿萬年嘆す  
の爲りのあそモ第く

柿石丈

義

柿石丈

義

残の毛衣代爲ちう地主を義  
座度のつゝ夢了中明ほるの毛  
むきめの御つるわづ

柿石丈

義

あかく浦詰りの風便をあ  
浦詰より毛衣代爲ちう地主を  
入院契のあ向たかうきりとす  
せんやふれも奉毛は笑ねの事  
うす

柿石丈

義

笠うれやきと毛衣代爲ちう地主を  
うすと毛衣代爲ちう地主を  
うすと毛衣代爲ちう地主を

柿石丈

義

千草毛下戸毛衣代爲ちう地主を  
あちもきくいのすりゆきうの地主  
のすりゆきうのすりゆきうの地主

柿石丈

義

先づまわす。あれの出をまほ  
ふか定め、せきゆねりあそ  
うきのりりつ

八月二日

吉川老人

等あ栗のさまで中は小力うさ  
き

も葉こて金のひドー一枝

もやくく

も葉こて金のひドー一枝

もやくく

妙風絃

妙風

聲面と人ふとうれこととの市を賣

門ねつまうり、あみとす  
もみ縄くみきよ

おのやうむ。栗のみ一筋舌のや  
あうしや一升もうつらとしきり  
かくこすあくあくつ

十二月十五日

喜たぬよ不破の園よりんばを え義

ナ有らる。

苦のこやしと秋うれいの松一筋

もつううやくみゆくねあくわら  
うわくわ

うわく

うわく

設やせよまやきりん牛瓦 え義

おとせよまやきりん牛瓦 え義

おとせよまやきりん牛瓦 え義

おとせよまやきりん牛瓦 え義

五有りうる

もじとく

多うう入木も高うあ木も高木も

信長公記

四十五

義

仙山に上へ移りてすこし寒がれ  
うやかあくほくとひの寝みの  
所もさうやれり

梅石丈

義

ぬみやけよがみをう一丁の酒うら  
おひ

は上

ぬれ糞をすぬまくるやをうる糞  
すすふわわんねの雪を糞

寺八五

義

ぬれ糞あるひに一疋送り下す  
有きもの出でやよ

十日

寺八五

義

ぬれ糞あるひに一疋送り下す  
有きもの出でやよ

寺八五

義

小吉郎後行やとをくアーラ  
ミトシテアリテアリカ一うを  
アリ

久八右

七舞

物おハ詩ホニ風ニヨリモハナ  
たあれヤヒル事モアリア

梅石丈

七舞

第幾度モ聲美とてよだ葉一  
葉赤くれハ喜びの門

赤出だ見三段

七舞

あうへうきとひのゆる日シノ義  
鬼山丈み高アヤヒト私方ニシテ  
換シテアリタス

梅石丈

七舞

松草ヌヌキヤヒトモ一筋モモモ  
物う次賣アセドアラホカ

梅石丈

七舞

五門ハ美出ヌタクハ聲モテモ  
物文采出ハ紅葉アリ葉モ不打前  
角アリシムアムクヘレ思波ニ未シテ  
物假りニシテ次賣アリトモ申中モモ  
ヨモモモ前ヘヒ出でモテアリ波サキ

梅石丈

七舞

みん一筋子孰チア達モアシテ  
モテ雪モれアリ

五

七舞

小吉郎後悔也とモヘアリ  
老之子アシテテアラカヒトモアシテ  
アシテ

久八首

老

梅石丈

老

竹於ハ殊かニ風も草も皆極ま  
たかれ伊のゆう事もあれア

梅石丈

老

第喜多ニ葉落とてよだ葉一  
襲ふれアマドウ

梅石丈

老

松草すみすやく一葉一枝もきを角  
ゆく次第アタマアラセ

梅石丈

老

玄門ハ美生すゑなに聲もアレ  
玄門ハ美生すゑなに聲もアレ

梅石丈

老

竹丈は良はれひまかアモアシアホ  
あらひまくねり先達アモアシアホ  
先達アモアシアホアモアシアホ  
アモアシアホアモアシアホアモアシアホ

梅石丈

老

みん一物ア孰ナモ送アキアモ  
アモアシアホアモアシアホ

梅石丈

老

まくらもあきるをめうめあくまけ  
ま寺を方往と及延引て末月十九  
と申は候うあくせやう

八日

梅石よ

口上

えほり紙みどりひよしを相成書

の

かやとみ

書林文

さくわふく作の手三か送りあわ

あくを画とす礼事やう

度立く

書林文

あくの度立

芳時半そひまたゆきの郎 と落

口上

源仲とよみの弟と弟と一誠和  
経明次の弟と

梅石よ

うゑす

小倉少佐て附ゆあそ

近

过古の事當初とされ度とけ

信ん後へはあうのよく附りあれ  
へうへつれたがとうとあくを  
こへやるもよろしくうれ

梅石よ

十二月二日

七

先づおもひをすゝ前にあらわすへ拿は  
ま寺善徳も及延喜ノ末月廿  
三日は陰もとせやう

八日

梅石丈

天叢

山上

まほす紙ふぞひアシの相成事

ノ

かうよ

天叢

ノ

絶えぬ御事も其處の太乙開泰  
さむとおへとも一寸も離れぬよ  
むちつて

口

一萬石内侍、おなじ御成門  
ろくねりへ

春ちつて

力

國はたれを下すゆべとやま  
毛風集すうくとらの御美<sup>ミ</sup>を

けあくそよそんやとあうれ  
の門

うやめ

梅石丈

ちゑす

彼れの成りてきみうおき拂<sup>ハシ</sup>そ  
おはまえあとてひつきめ<sup>ヒツキメ</sup>

梅石丈

そは

物の骨のとことくさんれの風を露  
ひるを身をあわせまき捨<sup>スル</sup>そ  
まわすあらき面<sup>ハタケ</sup>られうつ

松柳観音画譜

茶白眼の兎の画譜

ツモレ<sup>ツモリ</sup>く立<sup>タ</sup>起て<sup>タ</sup>んやの雪<sup>モダ</sup>  
おひ

梅石丈

そは

郭<sup>コト</sup>是<sup>シ</sup>目<sup>ム</sup>を<sup>ア</sup>と<sup>ア</sup>と<sup>ア</sup>茶<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>外  
おひ

その差工ぬ一宿のすと日かす

あそひ一まわるもあれうす

藝先寺庵坐候候、休門一念興

りゆゆよーや外くゆせよ

楠石丈

ノト

高貴ち地教事も風入うけと承  
多所ううの事、弓を射かつむ事  
れど

詠舟りら一お送りやうかと  
此ちうきてはやく

楠石丈

モダ

のる岩戸へりあへづく、うき栗  
二三升みやめ、枝葉す乃歌へ

ナリ

モダ

のものや、あるをうめく十みとく  
しけあくね、まかくへようく  
歌ひ

楠石丈

モダ

大もんにやの竹物をあ

楠石丈

シタキ

葉竹のよがゆくまくとく  
竜山坊と歌、あらゆるうきを  
承交す

楠石丈

モダ

拾本民吉坐ふ竹取お死去の  
怪承

月忌より歌をかこそべ

ロヒ

あやめの葉、そよごちまたさと  
美毛二羽送り下る、あはくま西

身舟

うれのや

楠石丈

義

十一月四日

雪をまへ馬よを祭め我身がむを葬

岸うちふのあへき一すらぬうり

素山よ

義

むこう風うお弟く、おわらひすはぬわと  
りほつては風が、夜の夕べ連れまの

あけやしせんじく風あまれてはる  
む桂とうとうあやひとむよみ

ナヘ、シ

義

時あたか夢も甚うるさくうけくわ  
むらむくわ

と候てくくと波よすがくお書  
物つて出来次第おきうり

楠石丈

義

むとくおせんへくういそきこふ乃く  
きとむきをやへ是又秋そよ

六月四日

義

楠石丈

義

かくまくはくはくとるとるとるとるとる  
ふすとあくくへまくくくれつ

楠石丈

義

かくまくはくはくとるとるとるとるとる  
あくせうり

文ひ反

義

竹の角のあくすくわくもく  
あくせうり

楠石丈

義

木の角のあくすくわくもく  
あくせうり

楠石丈

義

木の角のあくすくわくもく  
あくせうり

楠石丈

義

うれのや

楠石丈

義

十二月四日

雪室まへ馬主を禁め我身はも尋

峯さむのあへき一すら出でり

素山丈

義

も二度うお事くあわぢりく詠歌めと  
りゆつそは連行せんと連れまの  
舟やしそへと舟あされとて是  
む桂ようさくあらひとむき

ヤノハ

四

たち萬葉

義

詩かうる事く甚うるさくうけ方  
りうらわく歌り

楠石丈

義

と無てくらむ波よーがくさき  
歌つ出東次第うきうき

楠石丈

義

里

かくぬきうほくろそろをうをう  
かくあくくへまくくれつ

楠石丈

義

里

そほの人へらまく角あやかう  
あせうり

文山友

義

序を一絶ある所を知りてうへ  
うれおへく

梅石子

義

明るき居よ夫主に覺え爲す  
うきのうり

梅石子

義

うれも辭不きくは紙子の  
識うる中於の

十日

梅石子

義

勤めひやす下ふるあみつ  
とあま涉りて是方うけ立ふ  
うけ立つ

十日

梅石子

義

お足跡を數る者居る程も實なる  
者三々せ常とやうすうと云  
うけ居る事二カ月つまつま  
年々無計 未破滅

是

梅石子

義

そりぬけようへきを餘がれ  
お東は更にきのうり  
うけ立つとおへ

四日

梅石子

義

一作の文也すと云許可は主人  
あちもうれし在間との事一  
すかずきをめぐらむおおこり

とお

梅石子

義

梅石子

五

ひきのさよをきよはすの磯惣と寺  
酒徒を伴うて就一メ物もろい事

あああああああああああああああ  
金一もくく歌つ

梅石丈

七森

うむねあめい十ふ義あいと一二  
うむねゆわせぬたと

七森

大井口をさうとりて考へ村差  
れまくくうけ

梅石丈

七森

山もハナニヤ美とて東めで  
一木美しきとて歎くほんとある  
うれむつづ

梅石丈

ちのとみうみつけり

支そくゆゆくあま一まく不思  
あくじ

梅石丈

うめりへ

松平次うその木く義やよ  
めい義あくづ

梅石丈

七森

えがおをまくわむと大松ち  
氣き義とくとくとくとくとくと  
猶ううりく

梅石丈

七森

伊志部在役る的うけくせんと  
の役とうく紙弓とあまくひ  
うけく紙弓とく

梅石丈

影某を升美不列とす一義毎  
こうう進くうかくうかくうれ  
ノ

ひふひひひひひひひひひひひひひひ  
留國を外矣す。孰一メ拘る。モ此  
義あらむ。まあるる。ひまがく  
金一もく。とれ。

拘石丈

そ哉

うきぬく。あまひ。十ニ。義。あ。二。モ  
う。以深切。既。有。た。と  
う。

者。山。丈。

そ哉

大井。は。さ。と。ひ。と。考。材。差。  
れ。も。う。く。往。

拘石丈

そ哉

ゆ。も。ハ。十。ミ。焚。義。と。之。要。め。  
一。至。矣。け。と。之。歎。る。ま。く。お。か  
う。れ。れ。ア。フ。

九。肩。丈。

そ哉

お。もの。と。の。う。き。つ。け。れ。思。

拘石丈

そ哉

玄。子。山。丈。

そ哉

拘石丈

そ哉

玄。平。次。う。き。の。木。ト。鳥。や。よ。

め。り。義。あ。ア。フ。

そ哉

拘石丈

そ哉

伊。高。而。反。往。る。的。ア。行。セ。足。ア。  
の。教。と。ア。然。可。ア。和。モ。シ。ア。  
う。往。る。義。ア。ア。ム。ア。

拘石丈

そ哉

新。茶。を。外。矣。不。可。ア。行。一。義。留。

拘石丈

そ哉

梅石丈

不叢

竹子は生すお歴一枝を第  
浦河行船かぬ事多きとて

むりおうひしゆひむく

望

不叢

そぞももめのせきよたま  
あらわくもとめむ

未被風也

不叢

老はしまへ難とうす一方こ思  
度をかへせ叢に一白をや

きくまよとをかふ御よろ  
うやく事はほほみふかゆ

梅石丈

不叢

むすめ隠ニさりうすて  
方よへまよへれよ

不叢

きみよく種よくよる頃が不叢

文五郎の大坂へまよと承  
ゆく時ふね本を一同に可う  
渡とゆれ

望

不叢

不窮はよひよひよひよひよひ  
くうむすけよう内叢へきよひ

望

不叢

尾をよへたまうすむりくを  
乗ひつ

梅石丈

不叢

竹子は浦山を生す我一せ  
立新松は仙林坊の自らん集  
まつりおもひゆひむく

梅石丈

不叢

梅石丈

そ哉

能りぬ入來未だくもむらあせ  
より一ありやひわ候うれをね  
う思ひて

万葉集のさめゆき歌だあ  
ひ葉子づあどしきてはゆる

ひ月すつ

梅石丈

そ哉

きがのね、まきねよま  
枝うそあ木程く  
ちへ思れり

極うく月生夜松のみどかに暮  
一鳴りハ底根葉落るさう込モ  
秋葉脚ゆ極方へ事とよむ  
今、せ孤るハ至すくと海  
波うちるる松吹えへう歌  
音角は度ヤ入つ

う。

梅石丈

そ哉

もむらまむらゆうと取るく叶宿  
へのまむらゆう歌つ

梅石丈

もむらまむらゆうと取るく叶宿  
ま入流ゆほりう歌ふく歌西てう  
度りふ萬儀歌

五月十三

うこ

四毛経く多毛すから下ホア、高  
きい詠歌でぞす、あホア、伊うゆく

をとりやと承めて、さみゆうう  
舟、歌を

ひ月すつ

そ哉

ぬ候る、ほ一會う行とまよすくも  
うふうけうみ

は二

ぬ候る、ほ一會う行とまよすくも  
うふうけうみ

五十五

梅石丈  
五二三

ちま紀を説くまんじくすらをあ  
あく肉交へかうへくおつ

梅石丈  
五二四

むくものせんくまくをだのう  
かひき、是と教えく

梅石丈  
五二五

葉五千をうけ又辛く薦め  
部門色ハ旅る遙くのよもよ  
すくはきのゆゑへ

梅石丈  
五二六

う病て病へうみ落葉そぞ  
痛かむがふれかまく

梅石丈  
五二七

淨土寺入院次第時も一念のり  
この時の静か後れうつ心

梅石丈  
五二八

ぬ根と大雪是るも出立及  
延引の事多抱もと肩革腰に  
入東行つ

梅石丈  
五二九

久ハゆきをそくわせすゆ  
ハゆきのや辭亦あせりと  
うき

梅石丈  
五三〇

久ハゆきをそくわせすゆ  
ハゆきのや辭亦あせりと  
うき

梅石丈  
五三一

やうきわせすゆ  
おう

梅石丈  
五三二

萬葉集一卷之三の下ノ音  
亦有ノリ人よりくられア

七  
梅石丈

そせ

手の巻く文儀紙一束承下マナ  
參亦有ノリ人よりくられア

廿九

七  
柳石丈  
日和豆

そせ

山村の風景との

十九

九  
乳母子に逢む事モトセのあそせ  
トシテ

十九

九  
あそき女改名相處モメトナリ  
トシテ

十八

四  
山猪木(西)一束承下マナ  
日和豆

十八

梅石丈  
日和豆

四  
十八

重切身をきくやうる十度もまい  
うきうき只うれつ

ぬれ羽根のゆゑと取れ

うきうき只うれつ

梅石丈

手共

手共のいそぐくあひのほりうち  
ほきうけすと出本次第取れ

梅石丈

手共

梅石丈

手共

手共のいそぐくあひのほりうち  
ほきうけすと出本次第取れ

梅石丈

手共

久ハ爲子浦やアキラ村ノ及  
リヤもく亦有

カル

橋石丈

義

走白坂並ノ酒井と足を走  
りナリシテ

智光も當主が御所か見ゆる  
村ノナリシテナリシテ

二九三の村ノ事ニアリヤ  
ナ一屋ノ内とよりソツ者て

時あわせられてなむうれす  
形ちうひヤ一虫あざまわ

里

妙空寺義教の画也ヤトモ神  
祇

此起立角併せ多モトトヤトモ  
朱リテナリの事ノ木ノ多シテ

名古屋城主之御所也御宿ノ  
ノウリモ御了ヤ付あされ

十六又二三ニ

ハ文書ナムアミテ來テ 義

栗一打叶風塵ナシ下落  
よろしくされ給フ

手

義

御立シナ采めつゝくぬ味  
津ナシテくされ給フ 義

久立始かずの取材ノ始ア  
中第一段の御立下ろすくね  
入

義

五二七

義

義

五二八

義

佐伯し人以ひゆうやくは便ひ  
セナホトモモモ

文助助り事支拂中日出度方  
佐ノ赤坂一キモアツ

すみ

梅石室

五角二

青のリハ あづけみ枝  
とくふ一丁味極ふくとく 拳  
太さ無限今も一粒のツ

そめ

梅よせまれへの自画

写

左方萬葉てやく人感くや和  
歌りてあと名くあまむ方へあり

左方萬葉うのほとくヤ歌の

背負ひうちの集と詠る只中  
3おまされとく

四口

梅子草

五口

辛五味味儀とくち手毛七毛  
3ももくれづうれ

七味

汗證湯ふ褐牛をつて酸毛牛汗  
大根味

大根味

もくけゆひよから只今ももあ  
みれどもぬる味

梅石室

次十寺

風をかき散らさきれま梅 喜

はる

和之子ゆかと室はせうをも  
文義のつきをひやまくとくをも  
いやくのゆまくとくをも

トモヤク

梅石室

文義

時もあれ豈松(きの日)なうとくと  
時もあれ豈松(きの日)なうとくと

梅石室

文義

暮あ晴やもゆく猶くうす  
暮み余ゆむきもみ合半只今

一村

口上

文義

時もえんへれ祝はせよまとう  
處もまうやく方小ゆあめの細  
きりわく

一村

口上

文義

神や承宣み

口上

文義

青心碧(あおぞら)一色は  
染めつゝとどて そめ

口上

文義

井のつゝ捕岩レドる所とま  
く紫のゆき中歌の

四

文義

浜のく旅れ思立ドリ身ゆ  
あく時うかゆすすむ方まくは  
も振りのれあくと

十月ナウ

文義

ああう代官ふる代官こや  
方達はあうう下と多く四役ふ  
う多くうう歌のと

老八度

文義

眉すりこよむれのあままけ毛  
風吹ふるやくはれゆく  
やうれへゆく

梅石丈

そぞ

山野もうきうと一葉やくせう  
かうまあまく義六へゆく

さう

大坂すり色ああくすり松  
きくわきうりく

梅石丈

そぞ

時か月迫りせうこあらう此虫  
はよへたすれぞれのひ

十二月あら

梅石丈

そぞ

此を入まれとひく何ひのす  
万を度多と秋を詠むを發す

そぞ

梅石丈

そぞ

墨をくせ候とも一對松  
芥連す草トもあくようれす

そぞ

梅石丈

そぞ

去枝吹おあすれ色候ハ你

十五と半月吹くよとと水  
筋もと吹みつねうとと

さす

そぞ

村井与三直江

以上

も代えりじて

梅の木

の御の多お詫び申すを

さ

特支

國税課大輔  
65 K.O 號  
支那入 3. 10  
30 3.

國税課大輔  
65 K.O 號  
支那入 3. 10  
30 3.

義

上

國税課

大輔

65 K.O 號

支那入

3. 10

30 3.

